

「イスラーム」と「イスラーム教」

私たちは、西暦6世紀に預言者ムハンマドが啓示を受けて創始された宗教を何と呼んでいるだろうか。現在、日本語では「イスラーム」、「イスラム教」、また「イスラーム教」など、複数の呼び方が並存している。必ずしも一つの呼び方でなければならないわけではないが、なぜ「イスラーム」と呼んだり、「イスラーム教」と呼んだりするのだろうか。

「イスラーム“教”」ではなく、「イスラーム」と単に表現する背景として、イスラームとは「単なる宗教」ではない、という意見がある。すなわち、イスラームは生活や経済のシステム全体に関わっているために、キリスト教的な「宗教」概念にもとづく個人的な信仰に限定されないというのである。その一方で、キリスト教や仏教と呼んでいるにもかかわらず、イスラームにだけ「教」を付けないのは不適切だという見解もある。それは、イスラームが「単なる宗教」ではないということによって、「宗教」を超えたものだという特権性を付与するからであるという。それらの妥当性はともかく、ここでは今日多くの研究者が用いている「イスラーム」という呼び方を使用したい。

おやさと研究所の創設理念

筆者が所属する天理大学おやさと研究所の前身は、昭和17(1942)年に創設された天理教亜細亜文化研究所である。この研究所が、戦前から戦後にかけてイスラームに大変注目していたことは天理教の内外でもほとんど知られていない。4月は天理大学の創立月にも当たる。連載の序に代えて、おやさと研究所のとイスラームの関わりについて、簡単に叙述しておきたい。

研究所創設の理念は、1925年に創設された天理外国語学校(現・天理大学)にまで遡る。現在にいたるまで4月23日が天理大学の創立記念日に据えられているが、この日は創設者である中山正善天理教2代真柱の誕生日である。外国語学校は、天理教の海外伝道の養成機関として設立されたが、あえて創立記念日を誕生日に据えた点に、2代真柱の並々ならぬ決意が現れている。「私の生命に代えて、外国語学校というものをみてゆきたい」という言葉に現れるように、2代真柱は自らの誕生の意味を、天理教の海外伝道に重ね合わせたのだった<sup>(1)</sup>。

天理教亜細亜文化研究所の創設の目的は、「本研究所以国家目的ニ即応シテ亜細亜ニ於ケル民族文化ヲ調査研究シ以テ本教ノ活動ニ寄与ス」(「天理教亜細亜文化研究所規程」第二章第三条)と謳われている。研究所は、第2次世界大戦も激しさが増しつつあった時期に創設されたが、2代真柱は海外伝道を推進するうえで、伝道地についての学術的な調査研究の必要性を痛感していた。すべては天理教の海外伝道という目的の下、研究所は創設されたのである。

天理教亜細亜文化研究所の総裁には、2代真柱が就き、顧問には当時、日本の人文学を代表していた3人の研究者たちが名前を連ねた。その研究者たちとは、2代真柱の東京大学時代の師であり、日本における宗教学の草分け的存在であった姉崎正治、『広辞苑』の編者としても知られる新村出、そして2代真柱の学友で、天理語学専門学校(現天理大学)の校長も務めた古野清人である。姉崎と新村は戦前におけるキリシタン研究に関して著名な研究

者であり、古野は民族研究所(1943年創設)でアジア地域の宗教事情を担当する傍ら、『マホメット伝』(1940年)のようなイスラームに関する翻訳書も出版していた。

研究所の意図

昭和18(1943)年2月24日、2代真柱は、第1回所員会議において研究所創設の意図を次のように述べている。

今になって研究所を設けたということは、如何にも時局に便乗して出来たように見えるが、この研究所のことについては、自分としては夙に語学校の設立に於いて考えを深うし、図書館の創設に於いて、その手を染めたものと思っている。即ち、図書館の中に「日本文化研究会」を設け、語学校の中に「海外事情調査会」を設けさせ、今日まで名称や組織は違ってきたが、研究の必要を痛感し、その具現を計ってきたのは全く同じ気持からであった。更に教庁には「海外伝道部」を設け「史料集成部」を置いて来たことも、要はこの気持からであった。全てが本教伝道—世界救済に邁進すべき本教伝道上の必要に応じ、その処々に必要なる機関の一つとして設けて来たものであって見れば、これ等の諸機関は決して個々別々のものではなく、本質的に一連の連関性を持ったものであった。<sup>(2)</sup>

当時、東亜経済調査局(1908年創設)、東方文化学院(1929年創設)、さらに回教圏研究所(1938年創設)など、アジア地域を研究対象とする機関が存在していた。しかしながら、天理教亜細亜文化研究所は天理教の伝道のために創設された機関である。したがって、「研究所も唯単なる研究機関ではなくして、海外伝道に関する後方の参謀機関として始めて生命があり、海外伝道の推進力として進まねばならぬ」と、研究所が担う役割が示されていた。<sup>(3)</sup>「アジア」と呼ばれる地域を眺めたとき、戦前まで広く「回教」と呼ばれていたイスラームを無視することはできなかった。戦前の天理教の海外伝道においては、中国や東南アジアに深く根を下ろしているイスラームを理解することは、喫緊の課題だったのである。

イスラームから見た世界

この課題は今なお我々に提示された課題である。さらに、アジアにとどまらず、現代世界は、イスラームを知ることなく理解することは不可能であろう。筆者自身は宗教学を専攻するなかでイスラームに関心を抱いてきた。東南アジアや中東地域ばかりではなく、欧米諸国や日本にもモスクが建設され、ムスリム(イスラーム教徒)たちが生活している。

連載では、「イスラーム世界」を訪れた筆者が、書物からだけでは学ぶことのできない宗教的な文化や習慣に関して、宗教的にも文化的にも、「他者」だからこそ見えるイスラームの姿を描き出してみたい。イスラームの全体像に比べると、あくまで限定的な姿かもしれないが、学術的な視点と筆者の体験を織り交ぜつつ、連載を進めたいと考えている。

[註]

- (1) 「第三十七回天理大学創立記念式に於けるお話」『真柱訓話集(昭和37年度)』天理教教義及史料集成部、1963年、294頁。
- (2) 「亜細亜文化研究所第一回所員会議に於ける訓話」『管長様御訓話集(第3巻)』天理教教義及史料集成部、1944年、77頁。
- (3) 同上。